Amelia における公私さまざまの問題について

雲　島　悦　郎

H. Fielding (1707—54) の最後の小説 *Amelia* (1751)[1] は，彼のそれ以前の作品 *Joseph Andrews* (1742) や *Jonathan Wild* (1743)，そして *Tom Jones* (1749) などと多くの共通点を有することも確かだが，明らかに異質な点も認められる。そして，その違いは，彼が *TJ* の出版直前に治安判事の職についたことと深い関わりがあると考えられる。というのも，その頃から彼の public なものへの関心が一段と高まり，それも社会の秩序を重視する姿勢が作品に明確に打ち出されてくるからである。[2] そして，こういう点では，*Amelia* は *TJ* などとよりも *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, &c.* (1751) や *A Proposal for Making an Effectual Provision for the Poor* (1753) という論文，それに *A Voyage to Lisbon* (1755) という紀行などとの方が共通する所がずっと多いと言える。とは言っても，*Amelia* が政治小説のジャンルに入るようなものだというのでは決してなく，あくまでも平凡な私的個人を主人公とする日常的なドラマであることに変わりはない。

Amelia は，既に述べたように，それ以前の作品の特色を多分に持っているが，それとは少々別の意味で，特に *JA* や *TJ* の延長線上においてとらえなければならない一点がある。*JA* は，既に恋仲であった Joseph と Fanny が無事目出たく結ばれるまでを描いているし，*TJ* はそれよりも更にロマンスの面が強く，Tom と Sophia が先ず愛し合い，それから結ばれるまでを描いている。とすると，順序として今度は是非ともこのように男

女が結ばれた後の家庭生活を描いて見る必要がある。そして実際それが実行されたのが *Amelia* だとも言えるのである。こうして *Amelia* は，当時にあっては珍しく，他の作品が終る所で始まる作品となったのである。[3] とは言え，彼が作品の中で結婚生活という題材を扱ったのは，これが初めてというのでは無論ない。

彼が今では小説と呼ばれるような作品を書く以前に発表した戯曲の多くでも，結婚生活の種々相はふんだんに取り上げられている。中でも，*The Modern Husband* (1732) と *Amelia* の類似性は顕著である。大体彼は，以前の作品で十分にこなせなかった題材を再度取り上げ，それを深化していく傾向がある。だから，戯曲の中で取り扱った事柄が小説の中で再び生かされている例は多いが，*MH* と *Amelia* の類似は特に目立つ。だが，*Amelia* 以前に，夫婦の生活が描かれたのは戯曲においてばかりではない。小説の中にも何組かの興味深い夫婦が登場している。だから，結婚生活は，Fielding にとって一貫して重大な関心事であった訳だ。[4] *JW* は小説と呼ぶには少々問題はあるが，その中の Heartfree 夫妻は，幼い子供のいる若夫婦だという点では，*MH* の Bellamant 夫妻以上に *Amelia* の Booth 夫妻に近い。[5] そして，子供，特に幼い子供がいることによって，家庭の問題が単に夫婦の問題にとどまらない効果がある。

JW では，悪党 Wild の間違った結婚の方が関心の中心で，脇役の Heartfree 夫妻はあくまでもその引き立て役であるから，この夫婦の人柄，又その間柄がいかに望ましいものであっても，読者に訴える力は弱い。そこで，結婚生活の問題点のみならず，その肯定的な側面をも，理想的な結婚を果したカップルを主役に使って，更に大々的に取り上げて見るだけの価値はあった訳で，その実行の成果が *Amelia* だとも言えるのである。

作者がこのような作品を書いたのは，一つには家庭の幸せというものが社会との関わりにおいても，とても大切だと考えていたからであり，それは作者の代弁者的登場人物 Dr. Harrison の 'sermon-letter' 中の次の言葉にもよくあらわれている。

'... Domestic happiness is the end of almost all our pursuits, and the common reward of all our pains. When men find themselves forever barred from this delightful fruition, they are lost to all industry, and grow careless of all their worldly affairs. Thus they become bad subjects, bad relations, and bad men. Hatred and revenge are the wretched passions which boil in their minds. Despair and madness very commonly ensue, and murder and suicide often close the dreadful scene.' (X, i)

Booth と Amelia の結婚が理想的だというのは，金とか地位めあての convenience を第一としたものではなく，相手の人格的長所を認め合った，愛に基づくものだからである。その限りでは，彼等の生活はいかにも順調に行きそうに思えるが，実際は家庭崩壊の危機が徐々にしのび寄って来る。Dr. Harrison の勧めもあって，Booth は軍に戻るのを断念し，田舎で農業を営むようになるが，自家用の馬車をそなえるという見栄を張ったばかりに，村人の反感をかってしまい，そのためますます仕事はうまく行かなくなり，結局相当の借金を背負って，ロンドンに逃げ出さざるを得なくなる。身から出た錆とは言え，元をただせば，それは彼が丁度古代の英雄 Aeneas の如く，[6] 国のために戦に出掛け，二度も大けがをしたというのに，いざ平和がおとずれると，彼の属していた中隊は整理され，彼は半給の身になってしまうことにある。ここから彼の人生が大幅に狂ったのだから，責任の一端は愛国者につれない国の側にもあり，その点同情に値するとも言える。又，それ以後の彼等の苦難も，彼等夫婦の無分別のせいだけとして済ます訳にはとてもいかない。外的事情が彼等の生活を大きく左右していることは明白であり，本論では特にそういう点に注目しながら，彼等が危難をくぐり抜けるまでを追って見ることにする。

問題点を整理すると次のようになる。先ず，作者はそれ迄以上に public な事柄への関心を強めているが，その反面，作品の題材には家庭を中心に

した身近な問題が大きく取り上げられ，従来よりも格段に private な世界の出来事が展開する。そして *Amelia* の出来，不出来は作者がこの公私両面への関心をうまく結びつけるかどうかにかかっている。[7] 主人公達の生活は，例えば Booth の贅沢という個人的な悪と同時に，国家のために献身した者に対する国家の冷遇といった社会悪の両方に脅やかされる。こうして公私の悪が，少々の欠点はあろうとも善良な市民の家庭に災厄を及ぼしていく様が，*MH* よりもはるかに綿密に描かれている。そして，こうした諸悪の根が断たれないことには，英国もかつてのローマ帝国の如く滅びていくという作者の危機意識が読み取れる。[8]

しかし，ここにあげた公私の悪の例はまださいなものである。作者が本当に暴こうとしているのは，このような生やさしいものではない。作者は献辞の中で，'The following book is sincerely designed to promote the cause of virtue, and to expose some of the most glaring evils, as well public as private, which at present infest the country . . .' というが，この中にある「明々白々な害悪」のいくつかが外からじわじわと Booth の一家に襲いかかって来るのである。だが，上の引用文にもあるように，*Amelia* は悪を暴くだけではなく，それに立ち向っていかなければならない主体の側における徳の必要性を訴えていることも忘れてはならない。しかし，これについては既に別の所でふれたので，本論ではこの点についてはふれないことにする。[9]

一家の大黒柱 Booth は他の家族より一足先にロンドンに出て来た。ある夜一人街を歩いていると，一人の男が二人の男に打擲されているのが見える。義を見てせざるは勇なきなりとばかりに早速中に割って入って，争いに巻き込まれた形になり，やがて夜回り (watchman) に捕えられ，4人とも連行されるが，殴っていた2人の男は番人に袖の下をつかってまんまと釈放される。それを拒んだ Booth と殴られていた男の2人はそのまま拘留されて裁判を待つことになる。

TJ の場合と同様，この作品でも 'prudence' は一つの重要な徳とされて

いる。しかし，いかに‘prudence’が重要なものであろうと，Boothが自分の危険をも顧みず，いじめられている者を救おうとしたのを，ただ単に無分別な行為だとはきめつけられない。治安が乱れ，治安の維持に直接あたる者が信用できない情況で，弱者を守ってくれる者は，他人事でも見て見ぬ振りしてはおれぬBoothのような人間であり，彼の正義感と行動力は作者からも一定の評価を受けているはずである。[10] だからこの一件はむしろ，Boothが，人は全て感情でのみ動くという自説にもかかわらず，単に感情でのみ行動していないことを示すものと取るべきである。彼は他にも，名誉のために戦地に趣くべきか，妻への愛のために家にとどまるべきか迷ったりするように，結構徳を意識して行動する。しかし，後で見るように誤った名誉観ゆえに苦労もするのである。

‘prudence’という徳に関して言えば，身に危難を招かないように用心することが大切だと言っても，本人よりも周りに問題がある場合は容易なことではない。交わる相手に不幸の根本原因がある場合は，交際でも断たないことには防ぎようがないが，そのためには相手の正体を見抜くことが先決である。だが，これは‘suspicion’の能力があって初めて可能であり，それは‘innocence’とはなかなか両立しないと作者は見ている。[11] 善良な人間はなかなか悧巧には生きられないし，それはDr. Harrisonによって何度か崩れた‘wisdom’として否定される。[12] また外部の情況に問題があるとしたら，隠遁でもしたらどうかということになるが，*TJ*のthe Man of the Hillの例にも見られるように，作者は賞められた生き方とは思っていない。彼は己の殻に閉じ込もるような生き方は肯定しないから，[13] Boothの場合のように，せいぜい都会から田舎に退却する位が限度である。

Boothは拘留されてから間もなく裁判を受けることになるが，もしそこで正当な裁きが行われたなら，彼は拘留という珍奇な体験をしただけで済んだはずであった。ところが，担当の治安判事Thrasherがとんだくわせ者で，法律の専門的知識は皆無で，その上に判決は金次第，相手の身なり次第の不適格極まる人間と来るから始末が悪い。

この一件が語られるのは第一巻第二章で，章題は'. . . OBSERVATIONS ON THE EXCELLENCY OF THE ENGLISH CONSTITUTION AND CURIOUS EXAMINATIONS BEFORE A JUSTICE OF THE PEACE.' となっている。この中の 'excellency' は言うまでもなく反語であって，実際は英国の 'constitution' の欠陥をついているけれど，どちらかと言えば保守主義の彼のこと，決して根本的な欠陥があるとは考えない。しかし，ただ法律の運用に問題があるといった生易しい程度のものだとも思っていない。[14] ついでに言えば，*Amelia* の冒頭に展開される 'the ART OF LIFE' 論は無論個人の生き方についてのものであるが，これは社会の在り方についての作者の考え方にも当てはめることができる。即ち，'fate' に相当するような避け難いものが社会体制の本質にあるのではなく，為政者等の 'art' によって改善すべきものを改善し，うまく運営すれば，社会は無事まとまって行くという考えが汲み取れる。[15]

さて，制度上の欠陥の一つとして，この章では公職の面で適材適所を欠くことが大きな問題になっている。夜，街頭で強盗などから市民を守るべき夜回りの多くが，よぼよぼの年寄りであることなどもその一例として挙げられるが，その最悪の例は，人を裁く立場にある者が倫理感を全く欠く上に，無能極まることだ。Booth を裁いた治安判事 Thrasher はこのような不適格者の典型であり，彼については次のような描写がある。

> Mr. Thrasher . . . had *some* few inperfections in his magistratical capacity. I own I have been sometimes inclined to think that this office of a justice of peace requires *some* knowledge of the law, for this simple reason: because, in every case which comes before him, he is to judge and act according to law. . . . I cannot conceive how this knowledge should be acquired without reading; and yet certain it is, Mr. Thrasher never read one syllable of the matter.
>
> This *perhaps* was defect, but this was not all: . . . He perfectly

well understood that fundamental principle so strongly laid down in the institutes of the learned Rochefoucault, by which the duty of self-love is so strongly enforced, and every man is taught to consider himself as the centre of gravity, and to attract all things thither. To speak the truth plainly, the justice was never indifferent in a cause but when he could get nothing on either side. (I, ii; italics mine)

この中の 'some' とか 'perhaps' の使い方に見られるように，この箇所に一貫して認められる作者の控え目な姿勢が，かえって作者の押し殺した怒りのようなものを伝えるのに効果がある。[16] Booth はこのような男に裁かれたがために，いくら申し開きをしても無駄で，終に有罪判決を下され，牢獄生活の憂き目を見なければならなくなる。このように無能力者・不適格者が公職の重要なポストについていることが，*Amelia* における公の害悪の代表例である。これに類似した他の例としては，Trent が学んだ慈善学校の或る教師は，ラテン語の知識が全く無いのに，つて(interest)の力によってその職を得ていたことが挙げられる。Booth の軍隊時代の知人 Bob Bound は，国のために勇敢に戦った立派な軍人であるにもかかわらず，つてがないばかりに，若い者に次々と追い越され，失意のうちに退役し，今ではその日暮らしのみじめな生活を余儀なくされている。Booth も同様に不当な仕打ちを受けていると考えられる。第一巻第三章の Claudian からの引用と，[17] その前後の語り手の言葉は，社会における人の処遇が merit によらないが故に，Booth が Providence があるとは信じられないことを表わしていると普通理解される。だが，Booth 自身が己の処遇に不満を持っていることをもっと明らかにする表現はない。

Dr. Harrison は，Booth が軍隊に戻れるよう一肌脱ごうと決心し，つ

てを求めて或る貴族の所へ行くと，相手は見返りに選挙協力を依頼する。Dr. Harrison は，個人のmerit を第一に考えるから，そんな申し出には応じられず，話し合いは物別れに終る。Dr. Harrison にしても，このようにつてを頼らざるを得ないし，そのために出来る義理ゆえに，彼はどこかの貴族の子弟の付き添いで大陸旅行(grand tour)にも出掛けていく。

就職の決定は利害がらみで，才能は二の次である。そして，*Amelia* では，牢獄が社会のそうした面を象徴している部分がある。[18] 新入りの囚人は，牢に入る時はつる金 (garnish) を払うしきたりになっているし，おまけに，出る時は出る時で，'civility-money' なるものを「世話」になった印に牢番に渡さなければならない。保釈される場合でも，法律関係者に金をつかませる (touch) ことが常識であり，万事金次第の仕組みになっている。

牢の外でも，職を得て新しい世界に入ろうとする者は，有力者に同様にして金をつかませるのが当り前で，全て利害がらみである。このような現状を打開するには，一人一人の反省をまつというよりも，先ずその問題点を社会の指導的な立場の人に示して，制度・慣行をただすよう当局を促すということが，作家にとってせいぜい当時としては意味があると考えられた。だがしかし，その任に当るべき国会議員に James とか Bath などのような人物がなっているのは，何ともお寒い限りである。

人間には，自らが不幸を招いていながら，それを運命に責任転嫁する悪い癖があるけれど，人生は結局自らの責任で築いていくものだという 'the Art of Life' の考えが真に生きたものになるためには，例えば Booth が Thrasher のような治安判事に裁かれたのは身の不運と諦めるしかないような社会の情況を改めていく必要がある。Fielding は *VL* でも，当局に法律の改正を促すという姿勢をかなり明確に打ち出しているが，*Amelia* でも個人の責任と並べて，社会の責任も大きく問うていることは明らかである。

制度と言えば法が関係するし，法と言えば第一巻第二章で大きく取り上げられている'constitution' が問題になる。この語は普通「憲法」と訳

されるけれど，英国法に関しては適訳ではないそうである。[19] まして，Fieldingの解釈による'constitution'はもっと幅広い意味を持つので，「憲法」はとても用をなさない。それは，彼が公職の人選が適材適所を欠くことを'constitution'の欠陥としていることでも或る程度分る。彼は*An Enquiry into the Causes of the Late Increase of the Robbers, &c.*の序文で'constitution'を次のように定義している。

> Now in this word, the Constitution, are included the original and fundamental laws of the kingdom, from whence all powers are derived, and by which they are circumscribed; all legislative and executive authority; all those municipal provisions which are commonly called the Laws; and, lastly, the customs, manners, and habits of the people. These, joined together, do, I apprehend, form the political, as the several members of the body, the animal economy, with the humours and habit, compose that which is called the natural constitution.

これによると'constitution'とは単に国の基本法ではない。動物体と対比され，'constitution'は体格または体質のようなものとして捉らえられており，法の一般的概念を突き破り'custom'とか'habit'まで内包している。だから前にふれた'the most glaring evils, as well public as private'とは，他でもないこの政体の際立った症状を指していることになる。そして作者が提案するのは，謂わば国家の体質改善だということになる。国家というpublicなものと，家庭という極くprivateなものとの密接な関わり合いの形で*Amelia*の筋は展開していく。

Boothという平凡で善良な一市民の家庭の平和が，出鱈目な裁判というpublicな悪弊によって，大きく脅やかされているのは既に見た通りである。更にこれに追い討ちをかけるのが，adulteryの悪弊である。これはいつの世でも家庭崩壊の大きな原因となる。そして，主人公のBoothまでが，牢屋

で何年ぶりかに会った Miss Matthews と浮気をしてしまう。Amelia という愛妻がいるだけに，Booth はこの一度の失敗のために，同情にも値しないくだらない男と読者に見られがちである。その点，Booth 自身も，彼女のような立派な妻を持つに値しない自分をひどく責める。この浮気の一件は確かに小さな出来事ではない。作者自身も認める *Amelia* と *Aenead* の類似性の中でも，この束の間の情事は特に顕著である。その限りでは，作者は *Antony and Cleopatra* もはっきり意識している。[20]

Booth はこの一件で悩みはするが，妻に打ち明ければきっと許してもらえると信じており，いつまでも白状しないで事の発覚を恐れ悶々としているのは，彼の自尊心のせいとされている。そして，Amelia の方も，間接的に夫の浮気を知ったけれど，何ら騒ぐこともなく，夫に打ち明けられる以前に，黙って彼を許していたことが分る。当時の conduct book の類では，夫の一度の浮気位なら妻はこのような態度を取るべきだとしていたそうだが，[21] *Amelia* の作者がこのような考え方を無条件で望ましいと認めていたかは疑問である。しかし，語り手は，一応はいかにも Booth には情状酌量の余地がありそうな口振りである。そしてこの辺りの判断はアイロニーの問題とも絡んでいるので，かなり微妙である。とは言え，作者はこの種の問題が一般論で片付けられるとは多分思っていなかっただろう。語り手の弁明にも見られるように，その時々の情況も考慮しなければならないことは確かだし，他に作者が問題にしそうなのは，行為者の意図であり，又その行為の結果である。そして，それは又その行為者の全人格との関わりにおいて判断されそうである。[22] 先ず，情状酌量の余地については，Booth が自分の浮気を James に打ち明ける時次のように言う。

> "... I must open to you a long history, since I will not reveal my fault without informing you, at the same time, of those circumstances which, I hope, will in some measure excuse it." (IV, v)

面白いことに，この点ではAmeliaの考え方も一致しており，彼女はBoothに，‘“... I made large allowances for the situation you was then in ...”’ (XII, ii)と言う。

Boothの行為の意図とその結果に関して言えば，Boothは浮気相手のMiss Matthewsを傷つけるつもりはなかったし，誘惑したのは彼女の方であり，傷ついたとも思えない。しかし，それがAmeliaを裏切る行為であることは明白で，Boothは当然彼女を傷つける行為だったと悔む。だが，どうやら彼女はそのことで余り傷つかなかったようだ。それに，特に姦淫ということで大切な点は，彼が前以ってMiss Matthewsを狙っていた訳ではないことである。語り手もはっきり‘... though not absolutely a Joseph, as we have already seen, yet could he not be guilty of premeditated inconstancy.’ (X, ii)とBoothを弁護する。Booth達の姦淫の場合と違って，the noble lordの毒牙にかかったMrs. Bennettは，‘“... there was nothing of accident which had befallen me, but that all was the effect of a long, regular, premeditated design. ...”’ (VII, vii)とAmeliaに語る。Fieldingは同じ姦淫でも，あらかじめ意図したものとそうでないものをはっきり区別しており，それがここら辺りにも表われている。[23]

最後に全人格的な判断である。全登場人物の中で，Boothの人格を一番良く承知しているのは，当然のことながら妻Ameliaである。彼女が彼を許したのは何よりも彼への深い愛のせいであるが，しかしその愛は彼の人格の評価に基づいたものである。だから，この場合の倫理的量刑においては，彼女の判断は絶対的に信頼はできないにしても，その意見は大いに参考にすべきだということになる。

浮気は簡単に許せるものではないが，Boothの場合は相手を傷つけた訳でもないし，本人はそれでいやという程悩んだのだから，後は一番の被害者の妻がそれなりの理由があって許すというのなら，それも構わないとい

うのが大体作者自身の判断であろう。そして，これもまたTowersの言う‘the conventional but enlightened opinion of the age’[24]の一例であると思われる。

姦淫は個人的な事柄で，本来私的な問題である。しかし，多くの人間が他人を顧みず，姦淫を楽しみとして習慣化し，それが社会の一つの風潮ともなれば，最早単に私的な問題ではなく大きな社会問題でもある。*Amelia* にはこの種の漁色を娯楽とするthe noble lordと呼ばれる貴族が登場する。固有名詞を与えられないから，特定の人物というより，その種の貴族を代表する人物としての効果がある。[25] まだ独り者だというこの男は，社会の‘a set of drones’ (IV, viii) の一人として，刹那的な色恋事を唯一の仕事として，Ellisonという従姉というふれこみの女性を手先に使い，狙った獲物に巧妙に近づき，手段を選ばず，薬を使ってでも思いを遂げてしまう。Booth達の結婚の場合とは真反対で，上流社会では，結婚において金や地位を第一に考える悪習があった。このように結婚する男達にとって‘love’は‘appetite’でしかない。[26] そして，金と地位にまかせて，この欲望を満たそうと躍起になる。そして，この種の貴族の代表者the noble lordがついにAmeliaに狙いをつけたのである。

当時にあっては，夫の一度の過ちは家庭の崩壊につながらなかったとしても——Ameliaも，BoothとMiss Matthewsとの関係があれからもまだ続いていると思い込んだ時は，夫婦の仲もこれで終りと思ったけれど——妻の一度の過ちは，Bennettの例のように，たとえ薬を飲まされた上であっても，夫婦の破局を招く公算が大である。[27] もっともBoothの知り合いのTrentのように，必ずしも純粋な愛ゆえに結婚した訳ではない場合は，the noble lordが自分の妻に目をつけたのを良いことに，先ず美人局の真似をやって成功すると，以後は味をしめて売春婦のヒモ同然のやり口で金と地位を得て，贅沢ざんまいの生活を送っている。これこそFieldingが *MH* で描いた「当世風の亭主」の姿に他ならない。

Ameliaを狙った者は，the noble lordだけではなかった。Boothの無二

の親友とも思えたCol. Jamesまでが，彼女に食指を動かしてきた。かつてBooth夫妻が戦争の都合で外地にいた時も，Bagillardという好色漢が友人面をして近づいたことがあったが，その時は相手の意図をいち早く察したAmeliaの機転と友人Bathの介在によって事無きを得た。しかし今度はどうも容易には行きそうにない。

当時の悪習の一つに，紳士たる者は侮辱を受けたら，名誉のために決闘で決着をつけるべきだという根強い考えがあり，その極端な信奉者がCol. Bathである。彼がJamesと並んでBoothの親友であることは，決闘を美化する風潮にBooth自身も毒されていることを暗に示す。このような誤った名誉観[28]を持つ夫に，彼の友人が自分を誘惑しようとしていると告げようものなら，その恐ろしい結果は火を見るより明らかである。このような誘惑者の魔手から逃がれるには，夫婦が共に気付いて，協力して対処するしかないのに，Ameliaは疑うに足る証拠があっても，それをうかうか口にすることはできない。

それに，前にもふれたように，*Amelia*では'suspicion'と'innocence'は相入れないものとされている。'innocence'の権化のようなAmeliaはもとより，Boothもまた一旦信じた身近な者はなかなか疑おうとしない。それで，Boothはthe noble lordの悪い噂を聞いて，彼の魂胆を怪しみはするが，なかなかJamesを疑おうとしない。反対にAmeliaの方は，Jamesの怪しさには気付くが，the noble lordのたくらみを見抜けない。BoothとAmeliaの対話に，OthelloとDesdemonaの対話によく似た部分があるという指摘もあるが，[29] BoothとOthelloの決定的な違いは，Boothは妻を疑って嫉妬のとりこになどは決してならなかったことである。[30]

この夫婦の両方が共に敵に気付くには，相手が余程しっぽを出さなくてはならないが，敵もさるもの，容易にそのような証拠をつかませない。the noble lordの毒牙にかかったBennetでさえ，Ameliaが自分の場合と同じ手にはめられようとしていると知るまでは，自分の場合にもEllisonが間にかんでいたとは信じられなかった。それは，彼等が他者を平気で好

色の餌食にして，踏みにじる分でも，それ以外では結構面倒を見て大切にするので，本質をとことん知るまでは，どうしても善人のように映るからである。James も，Amelia に邪な思いを抱くまでは，Booth が病気になった時でも，親身に彼の世話をしたし，金に困った時も援助を惜しまなかった。*JA* では，Adams 達が旅の途中で金銭的に困った場合など，つい今しがたまで篤信家の口振りであった者が，途端に Adams 達を厄介者視するような偽善の例が沢山見られた。ところが *Amelia* では，James のように持てる者は，同胞愛などからきしなくとも，「友」のためには惜しげもなく金を使うことができるのである。彼等のこの 'generosity' は彼等が善良であることの保証にもならないし，彼等のその行動は，善人ぶる意志もないから厳密に言えば偽善という名もあてはまらないかもしれない。こういう上流人に対する Fielding の態度は実に ambiguous である。彼は，James については，Dr. Harrison に '"... in a Christian society ... I doubt not but this very colonel would have made a worthy and valuable member."' (IX, v) と言わせるし，Ellison については，その被害者の Bennet に '"... to do her justice, with all her vices, she hath some good in her."'(VII, ix) と言わせており，寛大過ぎる気もするが，別の箇所では上流人に対する痛烈な批判も聞かれる。

the noble lord や，そのお膳立てを勤める Ellison がいくら巧妙な手口を使うとは言え，何かきっかけを与える好都合な場が無いことには，その腕前を発揮することはできない。が，当時はそれに格好の機会や場にはこと欠かなかった。音楽会場や劇場など，比較的健全な場でさえも利用されたが，特に当時流行し始めた仮面舞踏会は彼等には絶好の場になった。Amelia も今少しの所でこのいかがわしい催し事の場に誘い出されそうになった。この他にも rout や drum など大小様々の社交的催しがあり，上流有閑階級と付き合えば，どうしてもこういう 'public place'[31] に顔を出さなければならなくなる。特に仮面舞踏会は，賭博と並んで作者が眉をひそめる二大悪習であった。[32]

だから 'prudence' と言えば，このような悪習に染まらないように，その種の遊びに耽るような人間とはなるべく接触しないことだとも考えられるが，Booth 達のように田舎から逃げるように都会に出て来て，借家住まいの上に，いつ逮捕されるか分らなくて，常に用心を怠る訳にはいかない身では，友を選ぶのも容易ではない。それに窮状を打開するには，職を探さねばならない。Booth は軍務に戻ることを希望しているけれど，前にも述べたように，将校職など，ある程度の公職の地位につくには金やつてが物を言う。このような立場の Booth 夫妻にとって，折角近づきになった the noble lord のような政官界に影響力を持つ人間との縁は断ち難いし，だからこそ the noble lord 達は常に就職で相手をおびき寄せるのである。

Booth 夫妻は今でこそ生活に困っているが，生活の見通しもなく結婚した訳ではない。経済的な裏付けのない結婚は作者の目にも感心したものとは映らなかった。Booth は薄給とは言え，一応将校である。生命の危険はあるものの，無事でいる限り普通の生活はできる。Amelia は実家が裕福で，財産も十分わけてもらえる見通しがあった。ところが，戦争が終ると，彼の属していた中隊は整理され，半給になるし，Amelia も母親が亡くなると，姉の遺言状偽造によって，ほんの涙金程の遺産を渡されただけで，家族は途方にくれなければならなくなる。そして Dr. Harrison の勤めで二人は農業に従事するが，結局失敗してロンドンに出て来ている。もし，ここで Booth が普通の労働者になり，そして金を貯えて商人として出直すことにでもなれば，話は大分変ってくる。Amelia の方は，社会的地位にもこだわらないし，[33] 愛さえあれば埴生の宿で沢山だと言う。[34] それに労働を尊ぶ発言もする。[35] しかし，Booth はそのようなことを余り真剣には考えないし，作者も，紳士として生きて来た者がそうとしてしか生きられないことには理解を示し，同情しているようだ。[36]

Fielding の遺作 *VL* に認められる彼の商業・貿易に対する大きな期待を見るなら，[37] 彼が *Amelia* の次に書くべき小説は，*JW* の宝石商 Heartfree 夫妻をもっとふくらませたような商人夫婦を主人公としたものだったとも

言える。そして，もしそのような新興中産階級を主人公とした作品を書くのに成功していたら，彼はもっと英国小説の産みの親にふさわしい作家になったかもしれない。

Fielding は下層階級の人間が上流階級の贅沢の風に染まり，やがて金の亡者となり，一獲千金を夢見て賭け事にこり出し，終には悪の道に走ることを大いに嘆いた。[38] ましてや Booth は元将校，昔の仲間の誘いを受ければ，まずいとは思いつつもトランプも断り切れない。Amelia が，生活費を切り詰めて，ある時などは，ふさぎがちな気持ちを奮い立てるために一度は飲もうとした半パイントのワインも，飲むのも思いとどまり節約している時，Booth は友達に誘われるまま外で飲み，おまけにトランプで手持ちの十二ギニーを全部すったばかりか，負けを取り戻そうとむきになり更に大枚五十ポンドの借りまで作ったのは，彼の無分別を語る挿話として有名である。そのトランプの借りを返すようにと，Amelia が自分の衣類の大半を質に入れてまで工面してくれた金を，何とか将校の職が得たいばかりに，友に勧められるまま，就職の口ききをしてくれるという人物の所に持って行くが，結局騙しとられた格好になる。この夫婦を愚か者と言ってしまえばそれまでだが，作者は彼等の苦難を無分別のせいだけとは決して見ていない。作者の目には，彼等は一般の水準からすればまだまだ幸せに暮らす資格のある者達と映っている。彼等の生活を苦境に陥し入れるのは，大小様々の悪しき風俗習慣である。そしてこの種の問題に対する明確な解答を出しているのが，作者の代弁者 Dr. Harrison である。彼は次のように言う。

> "... The nature of man is far from being in itself evil; it abounds with benevolence, charity, and pity, coveting praise and honour, and shunning shame and disgrace. Bad education, bad customs, debauch our nature, and drive it headlong as it were into vice. The governors of the world, and I am afraid the priesthood,

are answerable for the badness of it. Instead of discouraging wickedness to the utmost of their power, both are too apt to connive at it. . . ." (IX, v)

作者は，歪んだ教育・風俗・習慣が諸悪の根源であると捉らえ，社会の指導的な立場にある人の責任の重大性と，更に彼等の怠慢を指摘している。

今まで見て明らかなように，公私の悪(習)が「この国」には蔓延しているが，作品の中でこれらの被害を直接，間接にことごとく蒙るのが Amelia である。語り手の言葉通り，彼女はまさに「女ヨブ」[39] である。そして，苦難にめげないという意味で，彼女には 'heroic' の形容が実にふさわしい。[40] その限りでは彼女は立派な主人公であり，作品の題が彼女の名になっているのも少しも不思議ではない。

外的事情に多大の問題点があったら，それが改まるまでは，Amelia 達のような人間は，運が悪ければこのような悪弊の犠牲になるしかないだろうか。作者はこのような情況に対する主体の側の 'prudence' の重要性も無論指摘している。けれども，Amelia が誘惑者の手からうまく逃がれられたのは，彼女の 'prudence' によるのではなく，Mrs. Bennet が the noble lord の手口の全てを話してくれたからである。Mrs. Bennet はAmelia と姿や声がそっくりで，Amelia をひそかに慕っていた Atkinson と再婚するが，Amelia は一目見た時から Mrs. Bennet に特別な好意を抱くし，Mrs. Bennet も Amelia が直ぐとても気に入る。但し，両者，性格的に丸っきり違っており，Mrs. Bennet は Amelia と比べて現実的で割り切った所があり，それが彼女の落とし穴にもなる。彼女はまた学があり，誇り高い。そんな彼女のこと，余程 Amelia に好感を持たなかったら，恥を忍んで自分が the noble lord に凌辱された一部始終を語ってまで，Ameliaに警告を発してやったとは思われない。これは正に Amelia の人徳のいたす所と言える。

それと同時に，作者はこれを神のなせる技とも考えている節がある。そ

れは，何か超自然的な力が露骨に介入したというのではない。Fielding は *Amelia* と同じ時期に *Examples of the Interposition of Providence in the Detection and Punishment of Murder* (1752) という作品を発表しているが，彼はその中で，古往今来幾多の殺人者が何か偶然のきっかけで暴かれていく例をまとめて紹介している。そして，その偶然的な事象の中に，彼は天の介在を見ることを読者に求めている。恐らく治安判事として，無神論的傾向を犯罪多発の一つの原因と見て，犯罪防止のためにも一般大衆に神慮の働きを信じさせる必要があると考えたのだろう。そして，*Amelia* でも同様の意図が働いており，Providence が大きく取り上げられている。

Robinson という男が牢に入り，病に臥し，自分の死が間近と思い込んだ時，以前質屋で Amelia に偶然会ったことを神慮の働きと感じ，自分が昔弁護士の Murphy に協力して Amelia の母親の遺言状を捏造した事実を Dr. Harrison に対して告白する。そのお蔭で母の遺産のほぼ全てが Amelia の手に戻る。そしてこれを Dr. Harrison は '"... Your sufferings are all at an end, and Providence hath done you the justice at last which it will, one day or other, render to all men. ..."' (XII, vii) と表現する。こうして Booth 達は晴れて田舎に帰っていくということで，目出たく話は終る。しかし，これもみな Amelia が the noble lord の手から逃がれられたからである。だとしたら，語り手や登場人物の明言はなくとも，Amelia が救われたのも Providence の結果だと作者が考えていたととっても少しもおかしくはない。

神慮があると信ずることは，善人にとってはせめてもの慰めであり，悪人に対しては最後の警告としての意味がある。しかし，作者は神慮をあてにせよとは決して言わない。神の報いは必ずしもこの世においてある訳ではなく，例えば善を積むという積極的な行いの現世における確実な報いは行為者の内なる喜びであり，罪を犯さないという消極的な面への現世における確実な報いは，来世を意識した時の心の安らぎだと作者は考えている。

そして，*Amelia* ではこれが 'innocence' の概念の主要な部分を占めている。[41] これに関連し語り手は次のように述べる。

> Hence, my worthy reader, console thyself that however few of the other good things of life are thy lot, the best of all things, which is innocence, is always within thy own power; and though Fortune may make thee often unhappy, she can never make thee completely and irreparably miserable without thy own consent. (VIII, iii)

この世で最も望ましいものは 'innocence' であり，それはその気になれば誰でも保てるものだから，その他のどんな物に恵まれなくとも悲観することはないと言って，来世を意識することの重要性を訴えている。

Providence があるとは言え，徒らに神の助けを願うのは間違いであり，人はそれぞれ自力を尽すべきだが，それと同時に社会のしかるべき立場にある者は，制度や習慣の悪しき所を改める為に本腰を入れるべきであり，それは急を要する課題だと作者は説いている。

神慮なるものが大きく取り上げられていることは，現代の無神論的な読者にとっては余り面白くないだろうし，社会制度の改革についても，作者の発想法は現代から見れば古臭くて物足りないだろう。そのような現代の観点からの批判はいくらでもできるだろうが，それは本論では敢えて避けた。*Amelia* は Fielding の作品の中でも一番知的な内容が盛り込まれており，[42] それだけに難物で誤解される恐れが多分にある。*Amelia* はやはり出来が今一つで，どう見ても *JA* や *TJ* には及ばないだろうけれど，誤解に基づく評価だけは避けなければならない。正しい理解のためには，作者が伝えたかったことをなるべく作者の意図にそって捉らえることも必要で，*Amelia* についてはまだまだそういう努力がなされなければならないだろう。

〔注〕

1）　初版本の日付けに合わせて出版年が1752年になっている場合もある。本論の作品からの引用は全て *The Complete Works of Henry Fielding, Esq.*, ed. W. E. Henley (Barnes & Noble, rpt. 1967) による。但し，米国式綴りは英国式綴りに改めた。

2）　See M. C. Battestin, 'The Problem of *Amelia*: Hume, Barrow, and the Conversion of Captain Booth,' *ELH*, XLI (1974), 613–14.

3）　See A. R. Towers, '*Amelia* and the State of Matrimony,' *RES*, New Ser., V (1954), 144.

4）　'. . . they are further evidence of Fielding's continued interest in the marriage relationship as a subject for didactic commentary——direct or indirect.' (Towers, *op. cit.*, p. 150). また M. B. Williams, *Marriage: Fielding's Mirror of Morality* (University of Alabama Press, 1973) は，Fielding の戯曲・小説全般にわたって結婚の問題を扱っている。

5）　Booth 夫妻と Heartfree 夫妻の類似性については，Martin Price, *To the Palace of Wisdom* (Southern Illinois U. P., 1964), p. 310 と Sheridan Baker, 'Fielding's *Amelia* and the Materials of Romance,' *PQ*, XLI (1962), 446, n. 24 を参照のこと。

6）　*Amelia* と *Aeneid* との類似性については，Lyall H. Powers, 'The Influence of the *Aeneid* on Fielding's *Amelia*,' *MLN*, LXXI (1971), 330-336 に詳しい分析がある。

7）　Cf. 'In *Amelia*, however, he sought to make the concerns of the novel at once more private and more public than they had been in either *Tom Jones* or *Joseph Andrews* . . .' (Robert Alter, *Fielding and the Nature of the Novel* [Harvard U. P., 1968], p.144). Ronald Paulson によれば，private なものと public なものの結合は，novel の要素と satire の要素の結合であり，*Amelia* においては，'The public and private themes fail to mesh; indeed they seem to conflict.' という判定になる。See Paulson, *Satire and the Novel in Eighteenth-Century England* (Yale U. P., 1967), pp. 5, 163. また Andrew Wright も '. . . *Amelia* is a deeply flawed conflation of satire and the

novel.' と，同様の判定を下している。See Wright, *Henry Fielding: Mask and Feast* (Chatto & Windus, 1965), p. 105.

8) Dr. Harrison は某貴族との討論の中で，国の腐敗・堕落に関し，'"If it be so corrupt,"... "I think it is high time to amend it: or else it is easy to foresee that Roman and British liberty will have the same fate..."' (XI, ii) と言う。このようにローマと自国を重ねて考えるのは Augustanism の一つの特徴であるという。See Alter, *op. cit.*, pp. 146 ff.

9) 拙論「Booth の 'philosophy' と 'Christian philosophy'——*Amelia* について」(『下関市立大学論集』第27巻 第3号)。

10) この行動を W. L. Cross などは単なる無分別と見るが (Cross, *The History of Henry Fielding* [Russell & Russell, 1963], II, 318), Wright は '...Booth's excellence of character and generosity of spirit have landed him in prison...' (Wright, *op. cit.*, p. 49) という見方をする。J. S. Coolidge はこれらの中間で，Booth の行動を 'generous imprudence' のせいとする。See Coolidge, 'Fielding and Conservation of Character,' *Fielding: A Collection of Critical Essays*, ed. R. Paulson (Prentice-Hall, 1962), p. 166.

11) '... it is not want of sense, but want of suspicion, by which innocence is betrayed.' (*Amelia*, VIII, ix).

12) E. g., '..."you insinuated slyly that I was wise, which, as the world understands the phrase, I should be ashamed of..."' (*Amelia*, IX, iv).

13) このような閉塞状態に関しては，Morris Golden, *Fielding's Moral Psychology* (University of Massachusetts Press, 1966) 中の 'self-enclosure' の概念も大いに参考になる。

14) 'It will probably be objected that the small imperfections which I am about to produce do not lie in the laws themselves, but in the ill execution of them; but, with submission, this appears to me to be no less an absurdity than to say of any machine that it is excellently made, though incapable of performing its functions.' (*Amelia*, I, ii).

15) Dr. Harrison と某貴族の対話は，社会はその気になれば改善しうるとする立場と，一旦腐敗したらどうにもならないとする立場の好対照を示す (XI, ii)。

16) C. J. Rawson が本論と大体同じ箇所を引用して，irony 等について詳しい分析を行っている。See Rawson, *Henry Fielding and the Augustan Ideal under Stress* (Routledge & Kegan Paul, 1972), pp. 71—2.

17) Claudian からの引用については，Ralph W. Rader, 'Ralph Cudworth and Fielding's *Amelia*,' *MLN*, LXX(1956), 336—38 を参照。

18) Cf. Peter V. LePage, 'The Prison and the Dark Beauty of *Amelia*,' *Criticism*, IX (1967), 337—54. この牢獄の image については，拙稿「Booth の 'philosophy' と 'Christian philosophy'——*Amelia* について」でも少々違った観点からふれている。

19) 中村英勝　『イギリス議会史』（有斐閣　昭和34年）6頁。

20) E. g., '. . . she cast a look as languishingly sweet as even Cleopatra gave to Antony.' (*Amelia*, IV, i).

21) See Towers, *op. cit.*, pp. 145—6.

22) 'The new age required a literary form that would express a most just, "more historical" interpretation of man's actions, one that considered motives and extenuating circumstances before passing judgement.' (Paulson, *op. cit.*, p. 3).　　' In *Tom Jones* Fielding has reached a conclusion . . . that judgment is only possible when made of a whole being and not of an individual action.' (*ibid.*, p. 149).

23) See Towers, *op. cit.*, p. 155.

24) *Ibid.*, p. 156.

25) See Leo Braudy, *Narrative Form in History and Fiction* (Princeton U. P., 1970), p. 193; Paulson, *op. cit.*, p. 160; Alter, *op. cit.*, p. 152.

26) ' . . . James had married out of a violent liking of, or appetite to, her person . . .' (*Amelia*, IV, iv).

27) Cf. Towers, *op. cit.*, pp. 155—6.

28) Dr. Harrison はこのような誤った名誉観を 'the most romantic notion of honour' (*Amelia*, X, iv) と皮肉るし，Amelia は 'jealous honour' (*Amelia*, X, vi) と非難する。

29) Eustace Palmer, '*Amelia*—The Decline of Fielding's Art,' *EC*, XXI

(1971), 138ff.

30) ‘“. . . how often shall I protest that it is not of you, but of him, that I was jealous? . . .”’ (*Amelia*, VI, vi); ‘“. . . But do not think, Amelia, I have the least jealousy, the least suspicion, the least doubt of your honour. . . .”’

31) 例えば *Amelia*, VI, v; XI, iii にこの句が出て来る。又，この種の場で催される娯楽的行事は‘public diversion’ (*ibid.*, VI, viii) と表現される。

32) 作者の代弁者と言われる Dr. Harrison は二度にわたって (*ibid.*, X, i; X, iv), 仮面舞踏会を厳しく批判する。

33) E. g., ‘“. . . She [Amelia] was so kind as to say that all stations of life were equal to her. . .” ’ (*ibid.*, III, xii); ‘“. . . For my own part, I can level my mind with any state . . .”’ (*ibid.*, IV, iii).

34) E. g., ‘“. . .she softly wispered to me that she perceived there might be happiness in a cottage.”’ (*ibid.*, II, vi); ‘“. . . ‘. . .did I not tell you then that the smallest cottage . . . would be, with you, a paradise to me? . . .’. . .”’(*ibid.*, III, ii).

35) E. g., ‘“. . . I hope my hands are as able to work as those which have been more inured to it. . . .”’ (*ibid.*, X, vi); ‘. . .“I am able to labour, and I am sure I am not ashamed of it.” . . .’ (*ibid.*, XII, viii).

36) See George Sherburn, ‘Fielding’s Social Outlook,’ *PQ*, XXXV (1956), 4—5. Booth は Dr. Harrison に農夫になるよう勧められる前に，Dr. Harrison の質問に答えて次のように答える。

> ‘“. . .as I had no powerful friends, I could have but little expectations in a military way; that I was as incapable of thinking of any other scheme, as all business required some knowledge or experience, and likewise money to set up with; of all which I was destitute . . .”’ (*Amelia*, III, xii).

現代的な観点から，彼の甘さをせめることはできるが，しかし作者は，紳士としての Booth の情況を八方ふさがりと見ていると思われる。

37) Cf. ‘[Dr. Harrison says] “. . .if he [a minister] will employ few of

his hours to advance our trade . . ." '(*ibid.*, XI, ii).

38) *An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, &c.*, in *Works*, XIII, pp. 22ff.

39) 'the patience of any Job in petticoats' (VIII, ix).

40) 'heroic' という語は，Amelia 以外の人物に対しても，まともな意味でか又は反語として用いられるが，Amelia に対しては圧倒的に多くまともな意味で用いられる。反対に，Booth には一度も用いられない。

41) 'innocence' は必ずしも来世を意識した上でのものではない。次の引用文中の 'innocence' はもっと普通の意味で用いられる。

O innocence, how glorious and happy a portion art thou to the breast that possesses thee! thou fearest neither the eyes nor the tongues of men. Truth, the most powerful of all things, is thy strongest friend; and the brighter the light is in which thou art displayed, the more it discovers thy transcendent beauties. (*Amelia*, IV, v).

42) *Amelia* の内容は高等で難解だとよく言われる。 E. g., 'A bit of superficial evidence will show the consciously serious and "high-class" intention here dominent, and that evidence is his quotation of the classics.' (George Sherburn, 'Fielding's *Amelia*: An Interpretation,' *Fielding*, ed. Ronald Paulson, p. 147); 'There are few concessions to the general reader in *Amelia* . . .' (D. S. Thomas, 'Fortune and the Passions in Fielding's *Amelia*,' *MLR*, LX [1965], 186).